



のほりべつし
登別市

登別市にある登別・カルルス温泉は全国に知られる名湯です。1日約1万トンの湯がわき出し、10種類もの泉質を楽しむので「温泉のデパート」と呼ばれています。こども記者2人が温泉を守る仕事「湯守」を取材し、登別温泉の魅力を探りました。
(梶原康生、写真も)

多彩な温泉 湯守が支える

こども記者見ぶん録

室蘭市・旭ヶ丘小5年の清野七海さんと胆振管内豊浦町・豊浦小5年の脇田佐助さんが訪れたのは、登別の

量や温度、手作業で「いつでも同じ湯に」

登別温泉の歴史は古く、江戸時代には北海道の名付け親として知られる探検家、松浦武四郎も訪れています。今は市内の登別温泉町に14軒、カルルス町に3軒の温泉宿泊施設があります。

時代の終わりのころの1858年に北海道へ来て、その後今の登別に移り、重い皮膚病に苦しむ妻を治したいと願って湯小屋を建てました。館内には当時を再現した湯船もあり、行町さんは「私たちは『愛妻の湯』と呼んでいます」と先人の思いを受けつぎます。

つとした見た目ですが、指でさわった清野さんは「さらつとしてる」とびつくり。美容にも良いとされ、登別温泉土産の入浴剤などにも使われています。

温泉地の土台をつくったのが第一滝本館の創業者、滝本金蔵です。江戸

建物地下からくみ上げる別の源泉（温泉がわいてくる場所）も見学しました。こちらは食塩泉。部屋はせまく、脇田さんは蒸し暑さに思わず「むっ」としてサウナみたい」と声を上げました。行町さんが毎朝、塩と水、米を供え、源泉への感謝を伝えていきます。

い硫黄のにおいが広がりました。硫黄泉には細かいつぶのような「湯の華」が混じっています。「そのままだとパイプがつまるので、ここでしずめて取り除いてから、お風呂に送ります」と行町さん。

第一滝本館は、はださわりやにおいの異なる5種類の泉質を楽しめます。自然のめぐみである温泉は季節や天候で温度や湯量が変わります。常に気持ちよく入れるよう、湯守は毎日こまめに湯量や湯温を調整し、大浴場を清掃しています。すべて手作業です。



①第一滝本館の屋外にある硫黄泉の湯ため。湯守の行町さん（左）がひしゃくですくった「湯の華」の感触を確かめる脇田佐助さん（右）と清野七海さん
②施設の地下にある食塩泉。縁起物の紙垂がかざられ、行町さんは毎朝のお供えを欠かしません



計35の浴槽がある第一滝本館には、大浴場の上階に湯をためるタンクが計8基並びます。最も大きいものは約10トンの湯が入ります

湯守になって約10年の行町さんは「大変だけど、いつでも同じお湯を楽しむんでほしい。『いいお風呂だね』と言われると、湯守をやっていると語ります。第一滝本館の湯守は行町さんだけ。多くの温泉施設に同じような仕事をする人がいます。
取材後、2人は日帰り入浴も体験しました。男女合わせて35もの浴槽があり、どこから入るか迷ってしまうほどです。
すべて、わき出た温泉をそのままあふれさせる源泉かけ流し。脇田さんは「熱い湯もぬるめの湯もあり、のほせやすいぼくでも長く入れた」と笑顔。2人はすっかり、温泉にうれしい「温泉名人」になったようです。